

歩くまち

現状と課題について

- ・ まちの真ん中で高齢化が進んでおり、中には家から10分歩けない人も多い。
- ・ 都心部では、自転車から公共交通へシフトしてもらう手立が必要であるが、公共交通が不便なところでは、自転車を補助的な交通手段として考えれば良いのではないか。
- ・ 自動車は「総量抑制」ではなく公共交通への「転換」が必要。そのためには、公共交通のサービス水準を高めることが必要で、交通局以外の交通事業者と連携して強みを発揮すべき。
- ・ 交通局では「生活支援路線」として、年間10億円が使われているが、例えば、公共交通サービス向上のため、年間5億円を振り分けることも考えられる。
- ・ 自動車が入らない地域をつくり、誰が乗っても便利で、短距離で移動できるものが考えられないか。
- ・ 公共交通は、利用しやすいことも大切で、値段を下げて乗客を増やすことも必要。
- ・ 土地利用の問題と絡めて、遠くに行かずに生活ができるようなまちをつくることが重要。
- ・ 人間同士の関係で歩きやすくすることも必要。そこがソーシャルキャピタルともつながってくる。
- ・ 荷物が多いと移動手段として自動車を選択してしまう。例えば、荷物を預かる場所の充実や荷物輸送といったサービスの面で歩く仕掛けができないか。
- ・ 地域のマップが色々作られているが入手しにくい。ポータルサイト等でマップを集約し入手することができれば、まちを歩く目的もできるのでは。
- ・ 人の意識を変えることに投資をすることが必要。

政策の基本方向について

- ・ 自転車の問題は、市民サイドが中心となって考えることであり、市民の動きと上手くタッグを組む仕組みを構築することが必要。
- ・ 右京区で公共交通利用促進のモビリティマネジメントワークショップに取り組んだが、こういった取組を、継続的に水平展開していくことが重要。

市民と行政の役割分担について

- ・ 楽しんで歩いているということを指標にできないか。

10年後に目指すべき姿について

都市基盤

- ・ 京都のまちなかにとって、道は文化が生まれた場所であったが、モータリゼーションの進展に伴い、単なる交通施設になってしまった。
- ・ 市街地では、通学時に歩道の電柱をよけるため、車道に出なければならないなど、危険なところもあるが、地域住民はどこに相談すればよいかわからない。
- ・ 高速道路整備によって、京都から大阪へ出かけるのが便利に

- ・ 電柱を30cm移動するだけで、安全が確保できる道路はたくさんある。
- ・ 道路工事は、ガス、水道等、お互いに情報共有できていれば、一緒の時期に工事が行える。
- ・ 都市基盤については、幹線道路、区画道路などレイヤーを分けてまちを考える必要がある。特に、緊急車両をきちんと通すことを重視する必要がある。
- ・ 今後、道路整備が難しくなる中で、今あるものを資産として考えていくことが必要。そのうえで、歩行者を優先する気風を高めることが大事で、生活エリアでは速度規制を設けるなど進めていくことが必要。道路空間の再配分を進めていくことが必要。
- ・ できるだけ市民が使いやすい愛される空間を作っていくことが重要。
- ・ 道路は、通学時間帯には子どもたちが通り、昼間には物流関係の利用があり、時間帯に応じた利用の仕方考える必要がある。

- ・ 幹線道路以外の日常生活において、身近な空間である道路については、ソーシャルキャピタルを醸成する機能を有しており、このような視点も加えてもらいたい。
- ・ 学区や商店街などで、速度規制や、車の少ない通りは公園として活用するなど、地域の合意による、地域の交通ルールをつくることはできないか。

両分野全般

- ・ 都市間のネットワークを守るための容量が少ないところは充実することが必要。一方でパークアンドライドを充実し、まちなかの交通容量を減らすといった、歩くまちと都市基盤を両立するなど、攻めの気持ちをもった施策を展開する必要がある。
- ・ 歩くまちの展開と、高速道路をはじめ幹線道路との接点として、駐車場も重視する必要がある。

京都の未来像と重点戦略

- ・ 「低炭素の京都をつくる」は、フレーズがこなれていない印象がある。
- ・ 「京都型経済モデルをつくる」は、経済が低迷しているときには、行政の財政投資が地域経済に大きく影響を与えることがあるので、経済も共汗が必要。
- ・ 京都市の中で人材を育てるだけでなく、外から優秀な人材を集めることも必要。
- ・ 「人材を育てる」では、子どもや若者といった、今後の社会の担い手のイメージがあるが、シニアなどの経験をもった人材を活かすといった視点も必要。
- ・ 京都には多くの学生が集まってくるが、その学生に留まってもらうことも必要。
- ・ 「協力社会をつくる」に、多くのことを盛り込んでいるが、意味が伝わらないので、シンプルな言葉にすべき。
- ・ 重点戦略の「先進的な子育て支援」は、「先進的」とはどういうことかわかりにくい。
- ・ 参加の概念について、ここでの参加は、市民の市政への参加という意味で使われているが、現在、地域の方と議論していると、既にそれは超えていて、協力社会をつくっていきこうとする動きとなっており、参加という言葉の使い方を考える必要がある。共汗という言葉は、京都以外の所では、わかりにくいので、言葉を整理した方がよい。